

久保田 信<sup>1</sup>・興田 喜久男<sup>1</sup>・田名瀬 英朋<sup>1</sup>・鯉坂 哲朗<sup>2</sup>：  
 フジツボ類と海藻類が着生した生きたマガキガイの和歌山県白浜町“北浜”への打ち上げ  
 Shin KUBOTA<sup>1</sup>, Kikuo OKITA<sup>1</sup>, Hidetomo TANASE<sup>1</sup> and Tetsuro AJISAKA<sup>2</sup>: Strandings of living  
*Strombus (Conarium) terevellatus* attached with barnacles and marine algae on “Kitahama  
 beach” at Shirahama, Wakayama Prefecture, Japan

和歌山県田辺湾に生息する生きたマガキガイ *Strombus (Conarium) terevellatus* の貝殻上に付着生物は稀にしか見られないし、白浜町に所在する瀬戸臨海実験所の前浜の、通称“北浜”や“番所崎”に打ち上がった個体にも付着生物はほとんどついていない。過去の付着例としては、1975年から2年間にわたって実施された潜水調査により、マガキガイ貝殻上にコケムシ類や管生多毛類、石灰藻・藍藻などが付着することで殻がもろくなり万力で簡単に破壊できるとの報告がある(和田 1986)。近年、フジツボ類や海藻類が顕著に着生したマガキガイが“北浜”に打ち上がったので珍しい例として記録する。

フジツボ類のマガキガイへの付着例は、多数の打ち上げ個体中その頻度は稀だが、1998年3月21日に、興田により初めて1個体が発見された。そのマガキガイの体長は52mmで、貝殻上に14個体のサンカクフジツボ *Balanus trigonus* Darwin が付着していた。

この後、著者らの2005年5月末までの調査により、海藻の繁茂する春季の波浪の強い日に限って、サンカクフジツボや、それに加えてよく成長した海藻類が同時に着生したマガキガイが稀に発見された。サンカクフジツボはマガキガイ1個体に1-数10個体まで付着していた。田辺湾では、これまでサンカクフジツボが付着した生きた巻貝類の珍しい例として、ハナマルユキダカラガイ *Ravitrona caputserpenti* (Linnaeus) への付着例の報告がある(久保田・田名瀬 2004)。

マガキガイに付着するサンカクフジツボ(生きていることと死んでいることがある)に加えて、よく成長し、生きている海藻類の同時着生の稀な例では(図1)、後でまとめるように、3種の海藻類が付着していた場合が最多であった。このような付着生物の見られるマガキガイが北浜へ漂着するのは、波浪が強い日に、海岸付近にいた個体が、貝殻の長さより最大数10倍までの長さの海藻の付着のために打ち上がりやすくなった結果と推察される。これらのマガキガイはいずれも打ち上がったばかりの時は生きていたが、自然の海にもどしても、翌日に再び打ち上げられてしまうことから、衰弱して死亡すると推察される。

下記に生きたマガキガイ12個体に付着した海藻類およびその最大長と打ち上げ例数をあげる。紅藻類のトサカノリ *Meristotheca papulosa* (Montagne) J. Agardh 付着(図1)が5個体；紅藻類のトサカノリとマクサ *Gelidium elegans* Kuetzing の付着が1個体；褐藻類のウミウチワ *Padina arborescens* Holmes 付着が3個体；褐藻類のキレバモク *Sargassum alternato-pinnatum* Yamada 付着が1個体；褐藻類のマメタワラ *Sargassum piluliferum* (Turner) C. Agardh と紅藻類のマクサの付着が1個体；褐藻類のマメタワラと紅藻類のトサカノリとマクサが付着の1個体。マメタワラとフタエモクは長さ15cmまで、トサカノリは長さ10cmまで、マクサが7cmまでの長さだった。

また、北浜では、貝殻上によく成長した海藻類が付着したまま打ち上がった他の巻貝としてニシキウズ *Trochus maculatus* Linnaeus での例がある(図2)。マガキガイの場合と同時に波浪の強い春季に発見された。なお、「旬の食材 春の魚(講談社 2004)」にもコシダカガンガ

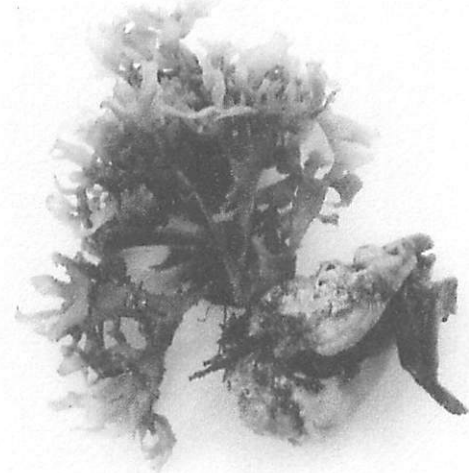


図1. 多数のサンカクフジツボと紅藻のトサカノリが着生した生きたマガキガイ(和歌山県白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”打ち上げ)。

ラヤギンタカハマなどの巻貝類にマクサが付着している  
写真が掲載されている。

引用文献

久保田信・田名瀬英朋. 2004. 生きたハナマルユキダカラガイに付着したサンカクフジツボ. *くろしお*, (23): 38.  
 和田恵次. 1986. マガキガイの成長を追う. *アニマ*14(10): 37-41. 講談社編. 2004. 「旬の食材 春の魚」, p.106.

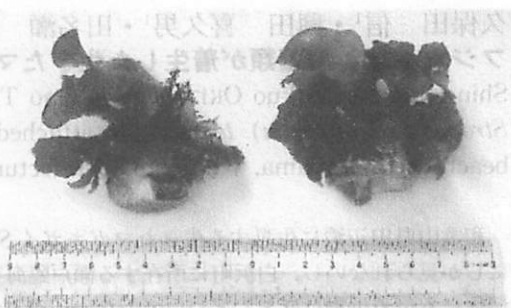


図2. 褐藻のウミウチワと紅藻のマクサが着生した生きたニシキウス (和歌山県白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”打ち上げ).

<sup>1</sup> 〒649-2211 和歌山県白浜町459 京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所 'Seto Marine Biological Laboratory, Field Science Education and Research Center, Kyoto University, Shirahama, Nishimuro, Wakayama 649-2211, Japan (email: shkubota@medusanpolyp.mbox.media.kyoto-u.ac.jp)

<sup>2</sup> 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院地球環境学堂資源循環学際沿岸域生態系保全論 <sup>2</sup>Department of Natural Resources, Graduate School of Global Environmental Studies Kyoto University, Kyoto, 606-8502, Japan

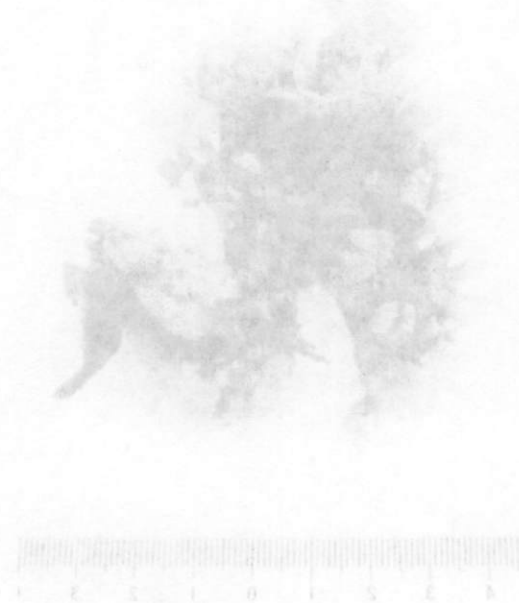


図3. 生きたニシキウス (和歌山県白浜町京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”打ち上げ) に着生したマクサの拡大写真。